慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	当麻曼荼羅の成立と背景
Sub Title	The historical origin of Taima Mandara (Amida Jodo-henso)
Author	志水, 正司(Shimizu, Masaji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.3 (1981. 12) ,p.35- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19811200-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

当麻曼荼羅の成立と背景

志水正司

一、当麻曼荼羅の成立

綴織当麻曼荼羅図は誰によって作成されたものであろうか。

古今著聞集・当麻曼荼羅縁起絵巻などには、横佩大臣の女が蓮糸で織らしめたという縁起譚が伝えられている。この説話にもとづき、伝承が成熟した鎌倉時代以降の、帝王編年記・尊卑分脈などによって、横佩大臣を藤原豊成とみなし、また豊成室百能の母が当麻氏であることをも考え合わせて、百能またはその娘を曼荼羅作成者に擬する説が、近年も有力視されているが、なお定説をみないというのが現状である。より遡る史料にもとづくとき、別様の推察が可能と思われるが、それについてはっきり述べたものが未だないようである。

まず、いつ作られたものか、曼荼羅下縁中央の銘文に天平宝字七年六月二三日の日付けがあったことは、建久御巡礼記や京都西方寺所蔵当麻曼荼羅図（鎌倉時代）の銘文などにうかがわれる。すなわち、まず建久御巡礼記には、

彼寺僧申サク、織仏事無ニ慥日記一、但此曼荼羅下縁　不レ壊之時、天平宝字七年云年号、慥被ニ織付一タリキ。

とみえている。

ついで、西方寺の当麻曼荼羅図の銘文であるが、当麻曼荼羅原本に点々と残存する文字を丹念に写しとろうとしており、ただ縮図しているため行などに乱れもあるが、よく原銘文をつたえているものと認められよう。いま（イ）残存する

銘文に後世補筆作文を加えたものかといわれているが、当麻曼陀羅注の銘文を便宜上の底本として、（ロ）禅林寺所蔵当麻曼荼羅図の銘文[1]にもみえて、西方寺図の銘文にみえる文字には○印を、（ハ）禅林寺図の銘文にはなく、西方寺図にみとめられるものには●印をもって示せば、次のごとくである。（誤写と認められる個所には▲印をつけた）

今此大曼陀羅者、人王四十六代帝、孝謙（ママ）天皇政也。
依中将局願、織変●▲●（補注）曽図顕荘厳、是則厭離穢悪境界（糸偏ナシ、スデニ摩滅シテイタカ）
求願西方極楽世界、因茲道心堅固一食長斎、天平
宝字七年六月十五日　无著世間　参籠此寺、但有浄
土経書写願　自去寅年夏六月、時時来此場称弥陀、
行住坐臥、偏専敬至、烏呼懸憑二如来之誓約、運思
三菩提之法輪、故尋華色　厭女（人）▲身、捨金衣、祈無生、於（女人哀トヨムカ）
人間不見貪、落鬚髪、久失天上之雲、志存明潔、依之
禅尼一人、不図来以蓮為糸、寺巽角穿井雖高乾無
水之土、如●●（ナシ）志願、修得之、成五色、然間同来一人織女、
執糸寄堂乾角、造織阿弥陀浄土変一●●鋪、又写●●●●称讃
浄●●●●●土経一千巻、深頂戴受持、以縷繡百袋入之　縦使、
於未来世、雖▲片▲端之見聞、於一仏土、為浄業之主伴、（行瑞トスル）
此変相者、不●簡親疎、為憂●患者顕之、皆蒙●●授記、有得
益之功、今応欲拝生身之願、織観無量寿経曼陀羅、
初文為序、起悪指掌、善▲●分定散、入末利●夫人清浄室、（輩トスル）

説一乗、来韋提希女荘厳宮、教西方、今為中将局願
弥陀現亦然、依之冀臨終正念、而傾西夕見仏、早則●●
預弥陀如来来迎、必坐九品之榻、願此功徳廻法界
利生不限、普及四生傍、共開生九品之志
天平宝字七年歳次癸卯季夏六月廿三日

禅林寺図の銘文と比べて、かなりよく原銘文をとどめたものといえる。

その原銘文には天平宝字七年六月二三日が指示されていたのであり、この日が藤原仲麻呂の室袁比良の薨(2)じて一周忌に当っていることは注目すべきであろう。

それでは、誰によって作成されたものか。淳仁天皇は藤原仲麻呂・袁比良の私第に入婿して居住し、彼らの擁立により天皇となったのであり(3)、袁比良を〝母となも念(おもほ)〟していたことが続日本紀天平宝字三年六月庚戌条の宣命に明言されている。その袁比良の一周忌の追善供養のため、また殊恩に報謝のために、当時天皇の生母として正三位に昇り、大夫人の称号をうけていた当麻山背(4)あたりが発願主となり、里方の当麻氏の人びとによって弥陀浄土の曼荼羅が織成せられた、と推察することが出来よう(5)。

〈系　図〉

藤原仲麻呂―藤原真従
藤原房前―藤原袁比良　粟田諸姉
当麻老―当麻山背
舎人親王―淳仁天皇

註

(1) 禅林寺所蔵当麻曼荼羅図の銘文については、浜田隆「当麻寺の絵画―とくに当麻曼荼羅を中心として―」（近畿日本叢書『当麻寺』所収）の註5を参照させていただいた。

(2) 続日本紀、天平宝字六年六月庚午条。なお、藤原袁比良については、角田文衛「藤原袁比良」古代文化六―五（のち『律令国家の展開』に収む）に詳しい。

(3) 続日本紀、淳仁天皇即位前紀。

(4) 続日本紀、淳仁天皇即位前紀・天平宝字三年六月庚戌条。なお当麻山背が天平宝字八年一〇月まで生存していたことは続日本紀に確認される（将二公及其母一到二小子門一云々）。

(5) ただ、翌年一〇月には、藤原仲麻呂の反乱により、淳仁・その母ともに、その地位を失っているから、曼荼羅堂などの造作は一時停頓したことが考えられようか。

(補注) この部分については「(織)二変繒図一」と訓じて、〈観経変の絹織の図絵を〉と解釈することができよう。

二、当麻曼荼羅の構図

当麻曼荼羅の構図が善導撰の観経疏に依拠していることは、古くから伝承されており、また諸先学により解説されてきたところである。善導のいわゆる観経四帖疏は玄義分・序分義・定善義・散善義からなり、なかんずく観経に説かれる十六観を分けて、十三観を定善としのちの三観を散善としているところに特徴が認められるが、その変相構図においても十三観と三観九品往生とが分別して描かれている。

一、中央は玄義分、阿弥陀浄土の光景を大きく描いている。楼閣に囲まれた前庭に阿弥陀・観音・勢至の三尊それを囲繞する聖衆を描写し、その前方には宝池と蓮花上に化生する菩薩などを、また上方には飛雲に乗り楽を奏し散華する天人等をあらわしている。

二、左縁は序分義、上端に化前序を置くほかは下から上方にむかって、阿闍世太子が父王を幽閉し、悲歎憔悴した韋提希夫人に仏が阿弥陀浄土を開示教説するという因縁譚を描いている。

三、右縁は定善義、日没を見る日想観よりはじめて、適宜に弥陀三尊を想念する雑想観に及ぶ十三観を、上から下方へ順

次描いている。

四、下縁は散善義、右から左方へ、上品上生より下品下生に及ぶ。次第に聖衆の数を減じてついには金蓮華のみながらも、三輩九品の来迎を図示している。

さて、中国において善導観経疏による浄土変相図が作成されたのはいつであったろうか。往生西方浄土瑞応删伝によれば、善導は

画二浄土変相一三百余舗、

とみえて、善導生存中より描かれていたことが知られる。なお、当時多くの西方浄土変が洛陽・長安の諸寺壁面に描かれていたことは張彦遠の歴代名画記にうかがわれるが、いまはすべて失われて、ただ辺境の敦煌莫高窟の壁画に残存するのである。

なかでも莫高窟のA二一七洞北壁の観経変（盛唐期）は、善導観経疏に依拠した典型的な構図を示して、当麻曼荼羅との近似が指摘されている。[1] 西域への善導浄土教の波及のほどは、橘瑞超らがトウルファンで得た阿弥陀経断片の跋文に

願往生比丘善導願写弥陀……

とみえ、また善導撰の往生礼讃等の写本がこの地方で少なからず発見されているなどの事実からもうかがわれよう。[2]

ここで留意したいことがある。当麻曼荼羅と莫高窟観経変とその構図が近接しているという事象は、すでに長安で変相構図がほぼ定着しつつあったことを考えさせる。それが西に伝えられて敦煌に残存し、また東に渡って当麻曼荼羅となったものであろう。

註

（1）河原由雄「敦煌浄土変相の成立と展開」仏教芸術六八

（2）岩井大慧「善導伝の一考察」（『日支仏教史論攷』所収）

三、観経疏について

ここで、当麻曼荼羅のもとになった善導の観経疏が、当時どのようであったかについてみるに、まず、写了律論疏章集伝等帳に

観経正宗分一部四巻沙門善道集七十六張

がみえる。[1] 大日本古文書はこれを天平一五年に収めているが、皆川完一氏は「この文書に見える題名は、天平一五年五月から写されたものを大体写し上げられた年代順に並べ、二〇年四月一日から天平勝宝元年八月三〇日までに写されたものの全部を含んでおり、三年正月から一二月までに写されたものは一部もその中に見あたらない。従って天平勝宝元年八月三〇日以降一・二年の間の或る時期に作成されたものであろう」[2] としておられる。従うべきであろう。また、八十六部五百五十四巻という端裏書をもつ論疏等目録に

観経正宗分四巻沙門善道師撰　七十六紙

とみえている。[3] 大日本古文書はこれを天平一六年に収め、皆川氏も保留されているが、[4] まえの文書と書目・紙張が（書入れを含めて）よく符合して、近接する年代のものと認めてよいであろう。要するに天平勝宝初年ごろには善導の観経疏は書写されていた事実が知られるのである。

つぎに、天平一九年一〇月九日の従禅院寺奉請疏論等歴名に

観経正宗不定善義　四巻

がみえている。[5] 傍点の部分は善導観経疏の特徴である散定二善義を摘記したものであろうか。そうとすれば天平一九年に書写のため禅院寺より観経疏が借り出されていることが知られよう。その平城右京の禅院寺は、道昭が帰朝ののち元興寺東南隅に建て止住した禅院の後身であり

此院多有二経論一、書迹楷好、並不二錯誤一、皆和上之所二将来一者也

と道昭伝の末尾にみえている。[6] 観経疏はあるいははじめ道昭により将来されたのであろうか。天平宝字年間の阿弥陀浄土画像や当麻曼荼羅の作製に、法相系の玄奘訳称讃浄土経の書写が併行するという特異な事情を考え合わせると、道昭将来の公算が大きいようにも思われてくる。

註

(1) 大日本古文書巻二四、二五五ページ
(2) 皆川完一「光明皇后願経五月一日経の書写について」日本古代史論集上、五六一ページ註15
(3) 大日本古文書巻八、五三七ページ
(4) 皆川完一前掲論文、五四二ページ
(5) 大日本古文書巻二四　四四六ページ
(6) 続日本紀文武天皇四年三月己未条

四、阿弥陀浄土図について

つづいて、そのころの阿弥陀浄土図についてみるに、光明皇后の阿弥陀信仰は、阿弥陀院の天平一三年造作の阿弥陀浄土変乾漆群像に遡ることができようが、[1] つぎの

外嶋院牒　造東大寺司
奉請阿弥陀浄土一鋪大唐和上進内紫帳金墨像
右、依内裏宣、応見件像、仍奉請如件
天平勝宝六年閏十月十九日

の文書は、[2] 鑑真が将来した紫帳金墨の阿弥陀浄土図を法華寺外嶋院[3]で熟見しようとしているのであり、光明皇太后の阿弥陀浄土図への関心のほどをうかがわせよう。

そして天平宝字四年光明崩御の七七日には、斎会が東大寺はじめ京内諸寺において設催されるとともに、

其天下諸国、毎レ国奉レ造二阿弥陀浄土画像一、仍計二国内見僧尼一写二称讃浄土経一、各於二国分金光明寺一礼拝供養

が発令されたのであった。[4] ここで思い合わされるのは、三善清行撰の円珍伝に

（貞観）九年、唐温州内道場供奉徳円座主、付二婺州人旦景全向国之便一、贈二則天皇后縫繡四百副（ママ）之内極楽浄土変一鋪長二丈四尺広一丈五尺織絵霊山浄土変一鋪長一丈五尺広一丈等一

とみえている記述である。[5] これによれば唐の則天武后が繡織の浄土変を作製していたことがうかがわれよう。則天武后を多く模範とした光明皇太后の遺願による阿弥陀浄土画像作成は、このようなことが機縁になったのであろうと考えられる。[6] なお、国分寺における礼拝供養は唐の諸州竜興寺での国忌日追善法要が先例とされたのであろう。[7]

これに相応ずるように興福寺流記の東院西堂条には

（天平宝字五年）冬十月八日、太師自願、奉為仁政皇后、敬造繡阿弥陀浄土変、

とみえている。[8] この藤原仲麻呂が光明皇太后の追善供養のため阿弥陀浄土変繡帳を作成したことが、年代・系縁の近さから、当麻曼荼羅を造る直接の先蹤になったと思われるのである。

註

（1）大日本古文書巻五、六七三ページ、阿弥陀悔過料資財帳
（2）大日本古文書巻一三、一一二ページ
（3）佐久間竜「傍系写経所の一考察―中島院・嶋院・外島院について―」続日本紀研究五―四、
（4）続日本紀天平宝字四年七月癸丑条
（5）大日本史料第一編之一、五九〇ページ
（6）望月信亨「当麻曼陀羅と善導の著書及び則天浄土変」寧楽一～三
（7）井上薫『奈良朝仏教史の研究』三三五ページ
（8）『奈良六大寺大観、興福寺』による